

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530819

研究課題名(和文) 地域差を考慮した若者の「甘え」と友人関係に関する研究

研究課題名(英文) A study of young people's "Amae" and friendship considering the regional variation.

研究代表者

谷 冬彦 (TANI, FUYUHIKO)

神戸大学・人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：70320851

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：「甘え」は日本人の対人関係を捉える上で有効であるとされながらも、日本国内における地域差については看過されてきた。例えば、民俗学的には、関西の若者は同年齢の気の合う者同士に限定して「ツレ」の関係を結ぶとされる。本研究は若者の「甘え」や友人関係のあり方について、心理学的な調査に民俗学的視点を取り入れつつ、関東と関西で比較検討することによって、若者心理の地域差について、その一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)："Amae" is effective to understand a Japanese interpersonal relationship. However, the regional variation of "Amae" has been overlooked. For instance, in folkloric perspective, the young people in Kansai region (lies in the southern-central region of Japan's main island Honshu) is assumed to limit to the person whom the same age nature suits and to connect the relation of "Tsure". The present study clarified some part of the regional variation of the young people mind by making comparative study in Kanto region (lies in the southeastern part of Honshu) and Kansai region taking a folkloric aspect to a psychological investigation about young people's "Amae" and friendship.

研究分野：人格発達心理学

キーワード：教育系心理学 民俗学 甘え 友人関係 パーソナリティ

1. 研究開始当初の背景

(1) 「甘え」理論の課題

土居健郎が主張した「甘え」についての理論は心理学分野のみならず、広く人文科学において現在も有効である。ただし、土居の目的は、比較文化的な日本という大きな枠組みで検討することであったゆえに、日本国内の地域差を検討する目的には適さない。「甘え」に関する実証的研究は谷(2000)による「甘え」尺度、稲垣(2007)による自己愛的甘え尺度によって精緻化されつつある。そのような測定尺度を用いて、詳細かつ大規模な調査によって若者の「甘え」心理の地域差を検討する必要があると考えられる。

(2) 民俗学的知見の援用による地域差の成立要因の検討

関西の若者は気の合う友人を「ツレ」と呼ぶ。対して、関東の若者はそのような関係を示す言葉を用いないこと、ツレの關係に伴う習俗は関東とは大きく異なることが民俗学的に知られている。伝統的な友人關係と習俗の違いが、若者の「甘え」心理における地域差の背景となっていると推測から、民俗学的調査を実施し、現代の若者の「甘え」意識と友人關係を理解する手がかりとする。

2. 研究の目的

(1) 心理学的調査によって、これまで看過されてきた、日本人心性の鍵概念とされる「甘え」の地域差について明確化する。

(2) 民俗学的調査によって、関東・関西における伝統的な友人關係とその習俗を明らかにする。

(3) 上記(1)と(2)の関連性を検討し、「甘え」や友人關係における地域差の文化的背景を示し、若者心理の新たな側面を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 心理学領域の調査方法

質問紙の構成

フェイスシートとして、年齢・学年・性別を質問し、大学入学前に主に住んでいた地域(都道府県・市区郡)を質問した。さらに、「同年代の友人を『ツレ』と呼ぶことがありますか。」という質問に対して、「はい」「いいえ」で回答を求めた。

測定尺度としては、「甘え」尺度(谷、2000)、自己愛的甘え尺度(稲垣、2007)、友人關係尺度(安井・谷、2008)を用いた。下位尺度は、「甘え」尺度で「直接的甘え」「屈折的甘え」「とらわれ」、自己愛的甘え尺度で「配慮の要求」「許容への過度の期待」「屈折的甘え」(「甘え」尺度のものと同一)、友人關係尺度で「友人への信頼」「友人からの肯定的影響」「やさしさ志向」「密着・同調志向」からなる。さらに、甘えに対する態度に関する項目を11項目新たに作成し、甘えに対して否定

的な態度を持っているほど高い得点として得点化した。項目分析を行ったところ、すべての項目が採用され、係数は.83であり、信頼性が確認された。この11項目をもって「甘えに対する態度尺度」とした。

調査対象について

関東4大学、関西4大学を対象に調査を行った。それぞれに所属する学生のうち、大学入学前に主に住んでいた地域が、それぞれ関東もしくは関西である者に限定して抽出した。その結果、関東は533名(男157名、女376名、18~24歳、平均年齢19.7歳)、関西は465名(男217名、女248名、18~24歳、平均年齢19.4歳)のデータが収集できた。

(2) 民俗学的領域の調査方法

調査手法

関東・関西の農村ないしは漁村に居住する高齢者を中心に、伝統的友人關係と習俗に関する調査を実施した。調査では民俗学分野における一般的な手法を用いた。具体的には調査地点在住の70歳代程度の男女を主な対象とし、調査項目の大枠のみを設定して被調査者へ面接調査を実施した。

調査地の選定

先行研究および小野(研究分担者)による調査成果を参考に、下記のとおり関東地方2地点、関西地方4地点を選定し、調査を実施した。

- ・関東：群馬県前橋市(農村)、千葉県松戸市(農村)
- ・関西：大阪府泉佐野市(農村)、大阪府堺市(市街地)、兵庫県神戸市(旧漁村)、兵庫県神崎郡福崎町(農村)

このほかに、地域差を明確化する目的で、小野が過去に実施した調査資料(群馬県吾妻郡高山村、群馬県館林市、千葉県館山市)を援用した。

4. 研究成果

(1) 心理学領域の研究成果

「甘え」と友人關係の関東・関西の差異

「甘え」尺度について、関東と関西で構造的な差異があるかどうか検討するため、それぞれで探索的因子分析、確認的因子分析を行った。その結果、両地域において、谷(2000)の因子分析結果と同様であり、パスと相關に等値制約をかけた多母集団同時分析を行っても適合度は高かったため、関東・関西の「甘え」の因子構造は同一であることが示された。友人關係尺度についても同様な分析を行ったが、こちらも因子構造が同一であることが示された。したがって、関東と関西における「甘え」と友人關係は、構造的には変わりないことが明らかになった。

また、「甘え」尺度、自己愛的甘え尺度、友人關係尺度の各下位尺度得点と甘えに対する態度尺度得点について、関東と関西で平

均値の差の検定を行ったが、いずれも有意差はみられなかった。このことから、「甘え」と友人関係のレベルの差は、関東と関西でないと考えられることが明らかになった。

「ツレ」に関する結果

「年代の友人を『ツレ』と呼ぶことがありますか。」という質問に対して、肯定した割合は、関東で6.4%、関西で13.3%であった。肯定率は、いずれの地域も低い、関西の方が関東よりも倍以上の割合であり、ツレと呼ぶのは、関西の方が多いことが明らかになった。

関東と関西で、年代の友人をツレと呼ぶ者とそうでない者について、各尺度得点の平均値の差に関して検定を行ったが、いずれも明確な有意差は得られなかった。しかし、関西においては、年代の友人をツレと呼び、ツレの関係をとっている者の方が、そうでない者に比べ、甘えに対する態度尺度得点が有意傾向で高く、「甘え」に対して否定的な態度をとっている傾向があった。この結果から、関西の若者においては、ツレのように親密な関係を持っていながらも、その関係において「甘え」を認められないアンビバレントな心性を持つ傾向があることが示唆された。

各尺度の下位尺度得点に関する因子分析結果

「甘え」尺度、友人関係尺度の下位尺度得点、および、甘えに対する態度尺度得点について、関東と関西で、それぞれ探索的因子分析を行った。その結果、関東・関西ともに、固有値1以上の3因子が得られた。

関東では、まず第1因子に、「屈折的甘え」「直接的甘え」「配慮の要求」「とらわれ」「許容への過度の期待」「密着・同調志向」が負荷した。また、第2因子に、「友人への信頼」「甘えに対する態度」が負荷し、第3因子に、「やさしさ志向」「友人からの肯定的影響」が負荷した(表1)。

一方、関西では、第1因子は関東と同様に、「直接的甘え」「屈折的甘え」「配慮の要求」「とらわれ」「許容への過度の期待」「密着・同調志向」が負荷した。また、第2因子に、「友人への信頼」「友人からの肯定的影響」「甘えに対する態度」が負荷し、第3因子は、「やさしさ志向」のみ単独で抽出されるという結果になった(表2)。

表1 「甘え」尺度、友人関係尺度の下位尺度得点、および、甘えに対する態度尺度得点の因子パターン(関東)

	F1	F2	F3
屈折的甘え	.82	-.15	.03
直接的甘え	.80	.34	-.03
配慮の要求	.77	-.12	-.02
とらわれ	.67	-.26	.21
許容への過度の期待	.51	.19	-.36
密着・同調志向	.40	.12	.25
友人への信頼	-.08	.73	.05
甘えに対する態度	-.03	-.59	.16
やさしさ志向	.09	-.12	.80
友人からの肯定的影響	-.06	.51	.53

表2 「甘え」尺度、友人関係尺度の下位尺度得点、および、甘えに対する態度尺度得点の因子パターン(関西)

	F1	F2	F3
直接的甘え	.82	.27	-.01
屈折的甘え	.80	-.13	-.03
配慮の要求	.75	-.12	.03
とらわれ	.67	-.19	.16
許容への過度の期待	.47	.17	-.37
密着・同調志向	.40	.12	.24
友人への信頼	-.09	.80	-.02
友人からの肯定的影響	-.04	.58	.38
甘えに対する態度	-.07	-.51	.20
やさしさ志向	.09	-.10	.81

このことから、関東とは異なり、関西では、「やさしさ志向」のみ別のものと、認識する傾向が示唆された。友人関係尺度の「やさしさ志向」は、「友達の内面に土足で踏み込まないようにする。」などの項目から構成され、他人の内面に深入りしないという内容の下位尺度である。すなわち、関東の若者は、友人関係において他人の内面に深入りしない気遣いが「友人からの肯定的影響」のような友人関係の肯定的な面と同様に捉えられている一方で、関西においては他人の内面に深入りするというのは、「甘え」や友人関係の肯定的側面とは違うと認識していることが示された。

心理学領域のまとめ

心理学的調査の結果からは、全般的には、「甘え」や友人関係について、関東と関西で明確な差異が示されなかったものの、各尺度の下位尺度得点に関する因子分析結果から、「甘え」と友人関係に関する関東と関西での差異が示唆された。

すなわち、関東と関西の違いは、「やさしさ志向」が「友人からの肯定的影響」のような友人関係の肯定的側面と同一因子で抽出されるか、「やさしさ志向」は「甘え」や友人関係の肯定的側面とは別因子として単独で抽出されるかという違いにあり、友人関係の距離の取り方が違っていることが示唆された。関東では「やさしさ志向」と「友人からの肯定的影響」のような友人関係の肯定的な面が同一因子になっており、同様のものとしてとらえられている。具体的には、「やさしさ志向」は、内面に土足で踏み込まないことであるが、関東ではそれが友人関係の肯定的側面と同様にとらえられているのである。一方、関西では「やさしさ志向」と友人関係の肯定的側面が別因子となっている。この因子分析の結果は、関東と関西の「甘え」と友人関係の距離の取り方の差異に結びつくものと考えられる。具体的には、関東の若者は他人の内面に踏み込まないようにするのが友人関係の肯定的側面ととらえているのに対して、関西の若者は他人の内面に踏み込まないような気の遣い方は「甘え」や友人関係の肯定的側面とは違うというような考え方をしていることが示唆されたのである。

(2) 民俗学領域の研究成果

調査1 関東における伝統的友人関係

関東では同じ集落に居住している年齢の近い同性の者のうちから、気の合う者が親しい友人となることが多いとされる。このような友人を示す語彙は確認できない。親しい友人は日常の相談や遊び仲間となるが、日々の労働や冠婚葬祭などにおいて明確な役割を担うことは無い。以下に関東村落の典型例を示す。

群馬県前橋市筑井町は平地に位置する、稲作と麦作の二毛作を展開する農村である。親しくする友人の中心は同じ村に居住する同年代で、同じ性別の者である。特に親しい友人と親密にすることはあるが、後述する関西地方のツレに類似する語彙はいっさい確認できない。共同労働は田植え時など農繁期において不可欠であるが、親族関係にある家とともに行うものとされ、親しい友人同士の共同作業は行われなかった。また、日常的な農作業は家族を単位として行う。冠婚葬祭は近隣の家々が労働力を提供して行われるが、これに親しい友人が加担することはない。親しい友人は葬儀や婚礼において来客の立場で関わるのみである。

調査2 関西における伝統的友人習俗

伝統的な友人関係は関東同様、関西でも同じ集落に居住する年齢の近い同性のうちで、気の合う者となる。そのような友人をツレと呼ぶ。ツレは男性に顕著であるが、過去には女性もツレを作ったという話も聞かれる。村落の成員（特に男性）は村落内でツレを作るべきとされる。ツレは日常生活だけでなく、労働や葬式や祭礼など非日常の交際において明確な役割を持つ例が見られる。次に関西村落の典型例を示す。

兵庫県芦屋市深江は市街地となっているが、以前は沿海に位置する漁業を中心とした集落であった。被調査者(70歳代)によれば、男子は小学生ころから集落内の気の合う者とツレと呼ぶごく親しい友人関係を持つようになったという。ツレになるのは年齢が同じ男子であったが、1歳程度の違いは許容されていた。被調査者が子どもの頃は5人から10人程度が同じツレとなっていた。ツレの交際は日常の遊びだけでなく、冠婚葬祭や労働においてもみられた。こうした交際は一生継続くものとされた。例えばツレの葬式には必ず出席するものであり、参列しないと非難される。葬式は親族や近隣の家々が労働力を提供して行っていたが、この中にツレが組み込まれることはなかった。漁業を中心とする深江では、漁は基本的に家族を単位として行っていた。しかし、親の体調が悪い時などは、ツレに乗船してもらい一緒に漁業を行うことがあった。ツレの共同作業と交際は祭礼にも見られた。だんじり祭りの時期になると、集落内の家のひと部屋をツレで借り、ここで祭りの準備を行い、また食事を共にした。なお、男性のツレについては明確であったが、

現在の調査では女性のツレ関係は不明確であった。70歳代の女性は、自身の世代ではツレは無かったとしている。ただし、自身が若い頃に年配女性はツレとともに寺社を参拝していたという。過去には女性にも明確なツレ関係が存在したと推測される。

民俗学領域のまとめ

親しい友人関係の特徴をまとめたのが表3である。関東関西ともに集落内に居住する年齢が近い同性が気の合う友人となることが多い。気の合う友人についての語彙は関西のみに認められる。親しい友人が労働や冠婚葬祭において互助的な役割を持つ例は、部分的ではあるが関西のみ見られる。

表3 関東関西の伝統的友人関係

地域属性	調査地	関東					関西			
		群馬県			千葉県		兵庫県		大阪府	
		高山村	前橋市	館林市	館山市	松戸市	神戸市	福崎町	泉佐野市	堺市
	地形	山間	平地	平地	沿海	平地	沿海	山間	平地	平地
	生業	農業	農業	農業	漁業	農業	漁業	農業	農業	市街
親しい友人との関係	呼称	無し					ツレ			
	年齢	年齢が近い								
	性別	同性								
	居住地	集落内								同じ学校
	共同労働 冠婚葬祭 の互助	無し					有り		無し	
		無し					無し	-	有り	無し

表には示していないが、関西では村落の成員（特に男性）は村落内でツレを作るべきという観念が認められることも大きな違いである。泉佐野市では、ツレを作れない子どもがいると、その親が同年代のツレ集団に自身の子どもを加えてくれるよう頼むという。すなわち、村落生活における強固な人間関係としてツレが存在してきたといえる。ツレは「気が合う」という任意の要素を含むため、村落組織として把握することはできないが、村落組織に類する役割を担ってきたと見られる。ただし、関西の伝統的友人関係は過去のものとなりつつある。現在の子供たちは過去のようなツレは作らないとされている。また女性については現在の高齢者の世代までがツレを持った世代だと推測される。

(3) 研究の総括

心理学領域の成果と展望

本研究では、「甘え」と友人関係について、関東・関西の地域差に着目することによって、大規模な調査研究を実施し、日本人心性の鍵概念とされる「甘え」と友人関係について、新たな知見をもたらした。「甘え」研究においては日本国内の地域差の存在自体が等閑視されてきた。関東・関西の「甘え」についての差異は当初の予測よりも少なかったが、各尺度の下位尺度得点に関する因子分析の結果から、関東と関西の「甘え」や友人関係

の傾向の違いが示された。関東の若者が他人の内面に踏み込まないように気を遣うことを友人関係において重視しているのに対して、関西の若者はそのような気の遣い方は、「甘え」や友人関係の肯定的側面とは異なるものととらえていることが示された。この成果は、これまであまり検討されてこなかった日本国内の地域差の存在に注目することで、「甘え」理論に新たな展開を示したという点において、一定の意義を有すると考えられる。今後の課題としては、本研究で明らかになった視点も踏まえ、更なる若者の心理的問題への応用に発展させていくことが課題となるであろう。

民俗学領域の成果と展望

民俗学ではツレの習俗が関西に顕著であることは通説的に知られていたが、体系的な調査検討は多くない。本研究では関東と関西の友人関係を比較検討し、伝統的な友人関係と村落社会における意義を体系的に把握することができた。また、伝統的な友人関係が担う労働や冠婚葬祭における互助について調査したことで、従来の村落組織研究において単なる任意的な集団として看過されてきた友人関係について、村落組織に類する機能を担っているものであることを明確にした。

本研究では過去の習俗を中心に調査を実施したが、関西地方ではツレの変化についても若干の調査を行い、女性のごく早い段階で、男性は40歳代より若い世代で、伝統的なツレの関係が無くなりつつあることがうかがえた。被調査者を年配者以外に拡大することで、こうした変化が現代の若者における友人関係にどのように移行したのかを把握可能であると考えられる。

「甘え」と伝統的な友人関係

心理学領域の成果である「甘え」と友人関係の地域差と、民俗学領域の成果である伝統的な友人関係の地域差がいかなる関連にあるのかについて、本研究では明確な結論を得るには至らなかった。計画段階では伝統的な友人関係である関西のツレ習俗は、関西地方に居住する現代の若者にも何らかの形で認められるものと想定していた。しかし心理学領域の調査対象となった関西の若者のうちでツレを持つ者は決して多くなかった。そのため関西地方における現代の若者と伝統的な習俗に連続性があるものと前提化することは困難と判断した。民俗学領域の調査地でも同様で、ツレに関する濃密な習俗は比較的若い世代の住民には過去のものとなっていることが確認された。こうした状況が想定できなかった理由としては、関西地方に居住する現代の若者を対象としてツレを調査した研究が無かったこと、民俗学では高齢者を対象に伝統的な習俗のみを記述することが通例であることが挙げられる。

現代の若者に見られる友人関係の地域差

とツレ習俗の関連性については現段階では明言を避けるが、「甘え」の理論が特定の文化を背景に論じられてきた以上、現代の友人関係と伝統的な習俗や文化には関連性があると考えるべきである。若者の友人関係がどのような習俗・文化と関連しているのかを明確にすることが今後の課題となるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷 冬彦 (TANI, Fuyuhiko)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究所・
准教授
研究者番号：70320851

(2) 研究分担者

稲垣 実果 (INAGAKI, Mika)
京都聖母学院短期大学・児童教育学科・
講師
研究者番号：40537990

小野 博史 (ONO, Hiroshi)
共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・非
常勤講師
研究者番号：30573042